【用語】指越・差越―送ってくる、よこす　打留メ―獲物などをしとめる　注進―事件など急いで報告すること　珍重―めでたいこと、祝うべきこと　万場村―多野郡万場町　神原村―多野郡中里村

【解説】朝鮮国王が国書と進物をもって徳川将軍のもとへ派遣した外交使節団は「朝鮮通信使」・「朝鮮信使」・「朝鮮来聘使」などと呼ばれた。その始まりは室町時代からで、これは倭寇禁止の要請や将軍就任祝賀が主な目的であった。また、豊臣政権のもとでも天正十八年（一五九〇）と慶長元年（一五九六）の二回来日した。江戸時代に入ると一二回来日しているが、初期の五回は日朝両国の政情や東アジアの動向などに関連して複雑な理由が秘められていた。それが明暦元年（一六五五）徳川家綱の将軍襲職の祝賀のため来日した通信使からは、両国の認識が「日本将軍襲職祝賀」ということで一致した。通信使の編成は正使・副使・従事官以下、総勢五〇〇人近くに達し、使節は徳川将軍への国書と共に高級布・人参・虎皮・駿馬・筆墨等々の進物を献上した。

来日に際し、幕府は諸藩に命じて海・陸の護衛を厳重にし、沿道の諸藩は新築・改装した客館で華麗な饗応を行ったという。この文書は、享保四年（一七一九）の通信使来日にあたり、幕府代官の久保田佐次右衛門が管轄下の山中領下山郷の割元八右衛門と中山郷の割元覚右衛門あてに、朝鮮使節団接待用の猪鹿肉を江戸へ持参することなどを求めた通達書である。